

～研修医日記～

Vol.18 『行きます！イカせて下さい～～👉』 —研修医タロウ君編—

はじめに: 自己紹介を兼ねて...

彼(研修医タロウ君)は球体が大好きだ。それも、ふたつ揃えば文句の言いようがない。あの美しさはなんと表現すればいいのだろうか。「至高」「究極」こういった表現が適切であろうか。(こういった事ばかり考えているから浪人が長くなったのではないか...) 日本語は素晴らしい。いくらでも頭の中で表現を言い換え、自分の欲望を満たせる。後日談だが、タロウ君はこの術を使って、時間(カメラ持ち)潰しをしていたらしい。医師として大丈夫なのかという疑問符が残る。しかし、こういった術が無ければ、長時間のオペをこなす外科医としてやってイクのはほぼ不可能であろう。

これから当院で外科志望研修医を目指す諸君よ！研修医になれば、お誘い・合コン... 様々な試練が待ち構えている。日々の業務をこなしながら、こういったコミュニケーションの場も大切にしていかなければならない。医師という職業は激務なのだ。だが、君たちは一人ではない。こういった修羅場を乗り越えてきた、すまし顔の猛者たちが当院には数多く存在している!? さあ、マッチングを乗り越え、一緒にすました顔で成長していこうではないか。

-----登場人物-----

研修医タロウ君: 当エピソードの主人公。タロウの由縁は本文で！

テニスバカ研修医: テニスばかりしている体力おばけ。

シャインマスカットオーベン: 長野出身。口癖は「もうええか？」

イケメンメガネ外科部長: 大学に貢献しまくった凄腕外科医。趣味は酒と〇。我々男子の目標である。

編集長兼外科診療部長: 体はクマより大きく、その心は宇宙より広い、我らがボス!!

お～ほっほほ～美魔女: お茶目で最高権力の持ち主。語尾はたいてい「お～ほっほほ～」

外科ローテ2か月前

長すぎた学生(性♡)生活を終えたタロウ君は麻酔科室にいた。御年28のまあまあのおっさんである。仕立ての良いスクラブを身にまとい、格好だけは上級医。学生時代は持ち前の雰囲気ですぐに女性教授の懐に入り込み、試験内容を入手し効率よく試験を突破してきた生粋のスポーツ少年である。この時彼は、2か月後に控える「本当」の外科ローテ試練を知る由もなかった...

外科ローテ初日

いよいよ外科ローテの初日である。2ヶ月の研修医生活をこなし、なんとなく病院の雰囲気掴んできた頃であった。志望科の一つでもあり胸が高鳴る中、不穏な噂がタロウ君の耳に入った...

テニスバカ研修医:「前にローテした研修医がとある先生を怒らせたらしいよ。」

研修医タロウ君:「そうらしいですね。頑張ります...」

テニスバカ研修医:「俺も去年はその先生に怒られたわ。」

研修医タロウ君:「どうすれば怒られないのか、アドバイスを下さい!!!」

テニスバカ研修医:「うーん...どこまで身体を張れるか♡..かな。あれは...頑張てな！
(ニヤリ)」

研修医タロウ君:「心の声;多浪(タロウ)で養った、どうとなれの精神でいか！」

～中略～

シャインマスカットオーベン:「うっす、うっす。君がタロウ君か。2ヶ月間よろしくね！」

研修医タロウ君:「心の声;何か面白そうなオーベンだな～」

イケメンメガネ外科部長:「おっ、ダブルダブルボギー君(+4)じゃないか。なかなかいいあだ名を
思い付いたね～」

研修医タロウ君:「心の声;誰が4浪じゃ～!!!って、4月の医局会での自己紹介の内容を、覚えて
くれているってことか！自虐ネタって最高やな～」

お～ほっほほ～美魔女:「君は仕事してくれる先生？これから見極めていくわ。お～ほっほほ～」

研修医タロウ君:「これが例の先生か...なるほど。」

～その後、彼は絶え間ない努力とセンスで徐々に信頼を得ていった～

外科ローテ1か月経過

時の流れは早い。まさにタロウ君の歴代彼女に対する気持ちの入れ替わり並である(嘘です♡一途です♡)。気が付けば、1ヶ月が経とうとしていた。優しい先生方のおかげもあり、外科ローテにも慣れてきた頃であった。

編集長兼外科診療部長:「タロウ君。君はなかなかうまいことヤッテいるらしいなあ～。」

研修医タロウ君:「な、な、何のことですか!？」

シャインマスカットオーベン:「何か色々と手技も教えてもらっているらしいですよ。」

編集長兼外科診療部長:「ほう～、手技ね～。どんな手技なん？指の使い方とか♡?!? ほんで指導は院内で！実践は院外で♡とか言われてるんとちゃう??」

研修医タロウ君:「何言ってるんですかー(笑)！まあ、でも付きっきりでご指導して頂いているんで、
上達が早いですう～。お～ほっほ～。」

シャインマスカットオーベン:「お～ほっほ～？そんな事言う前に、早くコッヘル持ってくれへん。
か？」

研修医タロウ君:「あっ、つい癖が... すいません。集中します。」

シャインマスカットオーベン:「ほんま、相変わらずちよけてんな。」

研修医タロウ君:「先生には負けますよ～。ってか、聞いてくださいよ！シャインマスカットオーベンがケモルット取る時、なんて言うか知ってますか？」

編集長兼外科診療部長:「腕だけでなく身体も縛らせてくださ～い♥とか言うてるんちゃうやろなあ～？」

研修医タロウ君:「違いますっ!!失敗したら、ごめんなさいね?って、言っていました。」

編集長兼外科診療部長:「... そ、そうか。」

研修医タロウ君:「心の声;言ってやったぜ!」

編集長兼外科診療部長:「でも、そうやって予め言っておくのは患者さんの心の準備も出来るしええ方法やな～」

研修医タロウ君:「心の声;ま、マジか。編集長兼外科診療部長は優し過ぎる。なんていい先生なんだ。入局させてください～!って、おれたすきやん。来年大学やん。人権なかったわ...(笑)」

外科ローテ1か月半経過

外科ローテもいよいよ終盤に差し掛かってきた。いつも通り、タロウ君は担当する患者の朝の回診を終えて、上申のため外科外来に足を運んでいた。このルーチンも慣れたものである。しかし、その日はなんとなくタロウ君の足は重たかった...

研修医タロウ君:「おはようございます。今、お時間よろしいでしょうか。病棟に関してですが、○△□で... 以上になります。」

お～ほっほほ～美魔女:「そういえば、先生は学会に興味があるんだってね？」

研修医タロウ君:「も、もちろんです。今回は外科のオペがあって行けなくて残念でした。でも、また機会があれば...」

お～ほっほほ～美魔女:「先生、たすきでしょ?ってことは来年暇でしょ？」

研修医タロウ君:「はい。では、そろそろ入室があるので...」

お～ほっほほ～美魔女:「来年、学会あるけど行く?イクよね？」

研修医タロウ君:「行きます!イかせてください～」

～なぜか、その返事はとても早かったらしい～

外科ローテ2か月経過

研修医発表当日。約1ヶ月かけて作った自己紹介動画も流し終え、無事終了。それなりの手応えを感じたタロウ君は高揚感に浸っていた。(是非ともこの動画は皆に見て欲しい。院内共有フォルダ「おみ」に入れてある。)

シャインマスカットオーベン:「お疲れ！流れるような発表～、脱帽だわ。」

研修医タロウ君:「うっす、うっす。」

シャインマスカットオーベン:「そういえば来年、学会行くんだって？」

研修医タロウ君:「はい！っあ、どこだか調べてみます～」

シャインマスカットオーベン:「どこだった？ってか、来年学会なんかあったっけ？」

編集長兼外科診療部長:「んっ？・・・そ、そ、それってもしかして、院内で付きっきりで手取り足取り指導したことを院外で身体を張って実践するために設定された会とちゃうんかあ～～!?💧」

研修医タロウ君:「えっ!?...💧💧」

【変集者後記】

これがタロウ君の最後の言葉だったらしい。そこから1ヶ月、院内でタロウ君を見た者はいなかった。噂によれば、いくら調べてもその学会に関する情報はなく、怯えたタロウ君は明石の方まで逃げ出して日記を執筆していたらしい……。

「学会」それは学問を極めた者達が集う勉強の場なのだろうか。それとも、医局費を使ったプライベートツアーという名の試練(すなわち院内での指導を院外で実践する場!?)なのだろうか。いずれにせよ、タロウ君にとってはかけがえのない経験になり一皮ムケることは間違いないだろう。さあ、当院で外科志望の研修医を目指す諸君よ！こんな素敵でスリルに溢れた病院で働きたいとは思わないか？当院にマッチングした暁には、是非ともタロウ君を訪ねて欲しい。もしかしたら、その頃にはタロウ君は居ないかもしれないが...

